



① 地方創生ほど誰も反対しないわりに実績の乏しいスローガンは珍しい。国政や中央官庁に責任はあるにせよ地方自治体や地方全体も問題ではないかと思っていたら、格好の指南書を見つけた。木下齊『まちづくり幻想』（SB新書、990円）は地方の実情を知り尽くした著者ならではの、目からウロコのヒントにあふれている。パンデミックで東京一極集中に歯止めがかかりつつあるという俗論（幻想）を本書は一蹴し、地に足のついたまちづくりを提案する。

「予算さえあれば地域は再生する」「みんな

がんばれば何とかなる」「外部の知恵を導入しよう」「よその成功例に学べ」。これでは失敗は目に見えている著者は言う。とくに中央のコンサルティング会社に丸投げするのは最悪で、カネがあつたら地元で人材教育を進めよというのは至言だろう。あまた登場する成功例、失敗例を生かさない手はない。巻末の「まちづくり幻想を振り払うための12のアクション」（①外注より職員育成、②地域に向けても教育投資が必要、③役所も…）は必読の問題提起である。

② 昨今の政治家や経営者に何より欠けているのが哲学というのは寂しい。と嘆いていたら小川仁志『むかしむかしあるところに、哲学者がやってきた』（高橋書店、1540円）が目にとまった。表紙に「7つの昔話で学ぶ哲学入

門」とある。漫画で楽しませながら哲学を学ばせてやろうという著者の魂胆が気に入った。

「桃太郎」では「その桃だれのもの？」でロツクの所有権、「鬼退治に行くのは運命か」でサルトルの実存主義、「鬼はほんとに悪なのか」でパスカルの繊細の精神、といった具合に見開き16コマ漫画と1ページの解説と哲学者の自己紹介によって、いやでも36の哲学思想が頭に納まる（はず）という仕組みだ。著者はれっきとした哲学教授。快作である。ただ政治家、経営者の即効薬になるかは保証の限りではない。

③ 日米関係に横たわる最大かつ喫緊の課題は地位協定だろう。松竹伸幸『日米地位協定の真実』（集英社新書、968円）は前文から第25条「合同委員会」まで現協定と元の行政協定を対

照させながら詳細に解釈と問題点を語る説明している。これを読んで日本は真の独立国なのかと理不尽さに憤慨する人も少なくないだろう。国民がおかしいとさえ言えばドイツやイタリヤ

並みの主権を取り戻すことは十分可能らしい。

④ 思考力を鍛えるというのは魅力的だ。つい出口汪『東大現代文で思考力を鍛える』（だいわ文庫、814円）を買ってしまった。まず東大の試験が選択式でなく100字前後で説明する、受験生のほんとの思考力を確かめる面倒な方式であることに感心した。題材は福永武彦、宇野邦一、リービ英雄、堀田善衛など12編で、テーマは近代合理主義、生命倫理、ポストモダン、科学精神など手ごわい。評者の自己採点は合否すれすれだった（たぶん）。（浅野 純次）